

---

# 繰り返す運命

道化師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

繰り返す運命

### 【Nコード】

N9209L

### 【作者名】

道化師

### 【あらすじ】

遥時3の二次創作です。

カップリングは、歩く18禁こと知盛×望です。

だいぶ古いデータがあったのでお蔵入りは

もったいないやー精神で投稿することにしました。

ゲームやってない人は意味不明だと思います。

暇で暇でしょうがない方だけどうぞ

たいしたもんじゃないです。

## 宴

空を見上げると大きな満月が暗闇の中にぼんやりと輝いていた。

源氏の勝利を祝う宴が賑やかに繰り広げられているけど行く気にはなれなかった。

数時間前に知盛を殺した。

何度も殺し、涙さえ出なくなった。

ただ感触が手にこびりついて離れない。

月明かりが照らす私の手はまるで黒い血で染まっているようで怖い。

今まで何人もの人を殺し、返り血を浴びてきた

もう何も知らなかった女の子には戻れない。

全ての人を救う力がほしい。

大切な人を守れる力がほしい。

繰り返した運命はいつも大切な人を失い、

変えられることのない運命が無意味に繰り返されるだけだった。

でも私は、また逆鱗を使い、あの人が生きている時に戻るだろう。

幾度変えられない運命に飽いて逆鱗を壊そうかと思っただろうか。

それでも私の手の中にある逆鱗は小さな光をたたえ、存在している。

逆鱗を壊してあの人が無遠にいなくなることは耐えられないから…

ただ一人私を対等に見てくれた人。

私のエゴのために…

あなたに会える喜びとあなたを殺す恐怖を抱えて逆鱗がまぶしい光を發した。

## 舞姫

平家の豪将である知盛にかなうものはいない。

恐怖を抑えこみながら果敢に挑む者をあつさりとねじ伏せ、冷たい屍を量産した。

やがて、挑む者もいなくなり作業のように一定のリズムで周りの者を切り捨てていく。

冷えた眼で次々と敵を切る姿に味方も恐怖の表情を浮かべていた。

…つまらん。

もつと楽しい宴をしようじゃないか。

「知盛!!」

多数の平家の兵を蹴散らし、知盛にまっすぐむかってくる女がいた。

長い髪を揺らしている姿は周りの兵と同じように血と砂埃で薄汚れてはいるが、それを除けばそこらにいる普通の女と変わらない。

少し力を加えれば折れそうな腕で剣を振るう。

女であることもひとつの要因だが、舞を舞うように優雅に剣を振るう様がひどく人目についた。

待ち望んだ宴が始まりそうな予感がした。いや、もう始まっていたのかもしれない。

「神子!!」

心配そうに叫んだ子供がいた。

どうみても5・6歳の子供が何故戦場にいるのか。

よく見れば女の後ろに髪短い尼であるう女と数人の男、一人の子供がいた。

そういえば聞いたことがある。

白龍の神子が現れたと。

突然現れた神子は平家の怨霊を封印し、戦いで勝利をもたらすと。

平家にとってはなんとも邪魔な存在だ。

源氏の神子に睨まれて不思議なほどに心が高揚した。

「ほう…いい眼をしているじゃないか。」

剣を構えた知盛を見て神子は眉をひそめた。

憂いのある顔にはうつすらと泣いたあとが見てとれる。

「この運命でもあなたと戦わなくてはならないのね。」

自分にいいきかせるように小声で呟く声は知盛のほかには聞かれることはなかった。

なぜ俺を知っているように話すのだろう。

この女には初対面のはずだったのではないだろうか。  
でもこの懐かしい声と違和感はなんなのか。

「何をいつている…俺と、お前は、初対面だろう？」

「お前じゃなくて春日望美よっ!!」

「

」

何かを忘れている気がする。

さっきから俺の中で何かがひっかかってとれない。

神子は俺を見ている。けれどひどく上滑りをしていた。

そう、強いて言うのであれば俺という名の俺を見ているようだ。

「手合わせ願おう。源氏の神子」

神子の返事を待たずに切りかかった。

神子は刃を受け止めると間合いを見て、はじき返し舞う。

鮮やかに打ち込んで受け止め、二人の刃が交じり合う。

ガキンッ！カンッ！！

永遠に続くかと思われた宴。

それは無粋な知らせで中断された。

「クッ…残念だな。また…次回、決着をつけよう。」

二人の宴は繰り返されていく。

## 舞姫後 知盛編

さら…さらさら…

微かな衣擦れの音が生まれては消えていく。

部屋をぼんやりと照らす一本のろうそくが頼りなく揺れている中、さらさらと音を奏でながら知盛は舞っていた。

その姿は昼間、触れたら火傷をしそうな熱を潜めた姿とは別人。

まるで嵐の前の静けさのようだった。

かたんという扉が開く音にも反応せずに一心不乱に舞い続ける。

ただ舞うことしか知らないように。

「知盛が舞う姿を見たのは初めてだな。」

戸口に立ち、将臣が呟くと、知盛は動きを止めて口角を上げた。

「くっ……兄上殿は舞に興味がないと見受けたが…？」

宴で将臣は白拍子には目もくれず酒を飲み、隣の者と話していたのは記憶に新しい。

「いや、綺麗だと思ってな。何と言う舞だ？」

感心したように将臣は尋ねた。知盛は再び目に炎を宿す。

「劉化宴という舞だ。……源氏の神子と戦った熱を冷やそうと思つてな。」

知盛は舞う。

己の炎を静めるために。

知盛は願う。

次の逢瀬が叶うことを。

将臣は黙つて知盛の舞を夜更けまで見ていた。

舞姫後 知盛編 (後書き)

望美バージョンは思い出し中。また思い出したらアップします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9209/>

---

繰り返す運命

2011年11月13日21時29分発行